

〔報 告〕

山林寺院の研究動向
— 建築史学の立場から —

Study trend of the mountain forest temples
— From the view of the architectural history —

箱崎 和久・中島 俊博・浅川 滋男

HAKOZAKI Kazuhisa, NAKASHIMA Toshihiro, ASAKAWA Shigeo

和文要旨：山林寺院に関する研究、とくに建築史的な研究はあまり進んでいない。現状では「山林寺院」という用語の定義すら曖昧であり、比叡山や高野山などの拠点の霊山を排除すべきという意見もある。本稿では山林寺院に係わる研究史を整理した上で、現存する重要な仏堂と発掘出土遺構を紹介し、立地・年代・寺域など山林寺院研究の諸課題を示した。さらに余論として、摩尼寺「奥の院」遺跡の調査成果から、上記諸課題への対応と解釈に言及した。研究史に深まりを欠く一方で、発掘調査データは徐々に増えており、体系的な研究を進めるならば、非常に将来性を見込める分野だと思われる。

【キーワード】 山林寺院、建築史、発掘調査、懸造、摩尼寺「奥の院」遺跡

Abstract : Study of mountain forest temples, particularly from the perspective of architectural history, has been neglected. Since the very definition of "mountain forest temple" is vague, one school of thought advocates the elimination of such sites as Enryaku-ji and Kongobu-ji on Mt. Hiei and Mr. Koya. In this paper, drawing on past research into mountain forest temples, we introduce important existing Buddhist temples as well as introducing archeological remains and sites including data on location, era, and temple grounds. Furthermore, including the results of investigation into the ruins of the innermost sanctum of Mani-temple we interpret the correlation and interaction between these above mentioned remains and sites. In spite of the lack of depth in this field of study, excavation data are gradually increasing. If systematic study continues, we predicts that there are excellent prospects for future study in this field.

【**Keywords**】 mountain forest temples, architectural history, excavation, overhang style building (kakezukuri), innermost sanctum ruins of Mani-temple.

1. 山林寺院シンポジウム

平成9年(1997)に発掘調査され、平成20年(2008)に国指定史跡となった鳥取市国府町「栃本廃寺跡」の整備事業が平成23年(2011)に完成した。7世紀に遡る山間部の伽藍に塔・金堂・講堂などの遺構が残っており、長年の調査研究を反映した遺跡環境整備に注目が集まっている(図1)。一方、鳥取環境大学浅川研究室は因幡

一の霊山、喜見山摩尼寺(鳥取市覚寺)の「奥の院」遺跡で平成22年(2010)に発掘調査をおこない(図2)、建築考古学・環境考古学的な成果をあげつつある(浅川編2012)。この二つの寺院遺跡を主題とするシンポジウム「山林寺院の原像を求めて」を2011年12月17日に開催した(図3)。シンポジウムの構成を以下に示す。

ごあいさつ 中川 俊隆(鳥取市教育委員会教育長)

1. 趣旨説明 浅川 滋男(鳥取環境大学)
2. 仏教寺院の原像を求めて
 - 講演1「山林寺院の研究動向
-建築史学の立場から-」
箱崎 和久(奈良文化財研究所遺構研究室長)
 - 講演2「キジル千仏洞をたずねて
-中国最古の石窟寺院-」
眞田 廣幸(前倉吉市教育委員会次長)
3. 栃本廃寺と摩尼寺「奥の院」遺跡
 - 報告1「栃本廃寺跡の調査と環境整備」
加川 崇(鳥取市教育委員会文化財課主任)
 - 報告2「摩尼寺奥の院遺跡
-発掘調査と復元研究-」
岡垣 頼和(鳥取市都市整備部建築住宅課
／前鳥取環境大学大学院)
4. パネル・ディスカッション(司会:浅川)
討論者:講演者(箱崎、眞田、加川、岡垣)
中橋 文夫(鳥取環境大学)
5. 閉会の辞

本稿は箱崎和久がこのシンポジウムで講じた内容に基づいている。当時、箱崎は日本建築史学会の論文誌『建築史学』で発掘寺院址に関する研究動向を整理したばかりであり(箱崎2011)、その全国的状況を下敷にして「山林寺院」に焦点を絞り、研究史と現状の課題をシンポジウムで報告した。本稿はその講演内容に加筆修正を施したものである。

2. 山林寺院とは何か

2-1. 「山林寺院」という用語

「山林寺院」はややなじみの薄い用語であり、定義が

非常に難しい。研究者によって理解にばらつきがあり、「山岳寺院」と呼ばれることもある。研究自体それほど進んでいるわけではなく、たとえば比叡山延暦寺や高野山金剛峯寺などを含めて「山林寺院」とみなす研究者もいれば、それらを除いて考える研究者もいる。奈良県南部の吉野山や大峰山など修験の拠点となるような寺院を含むのかどうかという点でも議論が分かれている。

奈良時代末期から平安時代初期の仏教寺院に対する教科書的な解釈に従うならば、平城京では薬師寺、唐招提寺、興福寺などの大規模寺院が多数営まれているのに対して、平安京内には東寺・西寺の二寺しか造営されていない。一方、私度僧や呪者の山林修行は奈良時代からおこなわれており、平安京内には寺院を造れないので、山間部にもっぱら寺院の建立を求めた。その代表が延暦寺や金剛峯寺である。延暦寺と金剛峯寺を開いた最澄と空海が、密教を中国からもたらす。ここに南都仏教との画期が生まれる。

古代の山林修行と仏教について本格的に論じたのは日本古代史の藺田香融(1957)である。奈良時代の「山林仏教」は、興福寺や東大寺などの官大寺、つまり国家仏教寺院と切り離すことができない結びつきのあることを藺田は論証した。たとえば奈良の元興寺や大安寺の僧は吉野の比叡山寺で山林修行をしたことを示す史料がある。一方、考古学の上原真人(1986)は、たんに山の中に立地するというだけではなく、僧尼の修行にふさわしい俗世との隔絶性が必要だと述べており、さらに近年では、同範の瓦による平地寺院と山林寺院のネットワークをつよく主張している(上原2002)。実際、1990年代の半ばから後半にかけて発掘例が増えてきており、瓦を媒体とした平地寺院と山林寺院の結びつきに注目が集まっている。



図1 国史跡「栃本廃寺」金堂整備状況
(鳥取市教育委員会提供)



図2 2010発掘現場公開チラシ
(2010)



図3 シンポジウム「山林寺院の原像を求めて」チラシ(2011)



図4 室生寺境内地図
 (『大和古寺大観 第6巻 室生寺』岩波書店1976より転載)



図5 室生寺金堂 (箱崎撮影)

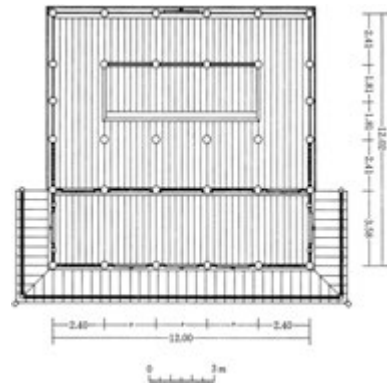


図6 室生寺金堂平面図
 (『大和古寺大観 第6巻 室生寺』岩波書店1976より転載)

2-2 「山林寺院」の定義

「山林寺院」については、未だ共通の理解を得ているわけではないが、斎藤忠 (1997) と上野川勝 (2007) が定義を試みている。

斎藤は「僧侶などが、山林修行を目的として建立した寺院である。すなわち山麓・山間・山頂などでその周辺に叢林がある閑静な境地に立地し、境域・堂宇も、その地勢に順応して定められ、建立された寺院である」と定義しているが、やや漠然とした感がないとは言えない。それに対して上野川は「山の山頂付近や斜面 (山腹) やふもと (山麓) に立地し、複数 (2・3段以上) の平場 (平坦面) が造成され、そこに寺院や仏教施設を建立し、山林修行や宗教活動や生産活動を展開した痕跡を残す、古代から中世の宗教施設の遺跡」という、より具体的な定義をしている。また近江昌司 (1998) は、「山岳寺院の名は比叡山・高野山以後に見られるような平安朝の密教系寺院をさすもので、(中略) 8世紀の山林修行・山居禅行を基調に展開する寺院とは区別すべきであろう」として、「山林寺院」を適当な名称と提案した。「山林寺

院」という用語がようやく共通言語として認識されつつあると言えよう。

3. 建築史学からのアプローチ

3-1 建築史学の先行研究

建築史関係の先行研究を整理しておきたい。福山敏男 (1936) は文献史料から延暦寺・東寺・西寺・神護寺・金剛峯寺・醍醐寺・室生寺の造営について論究しているが、「山林寺院」に直結するほどの考察はなされていない。日本建築史の教科書として多くの大学が採用している太田博太郎 (初版1947) 『日本建築史序説』は、平安時代の寺院についても当然概説している。密教建築の特徴として山上で営まれる伽藍があり、密教の伝来に伴って平安時代に多宝塔が出現し、礼堂造と呼ばれる仏堂が発生することなどを紹介している。高島成侑 (1974ab、1976) は国東半島六郷満山の寺院についての研究を進めているが、紹介程度のものであり、山林寺院の本質的なところには踏み込んでいない。藤井恵介 (初出1986) は

「山岳寺院」という用語をもちいており、金堂のような中心建築がなく、講堂が主要な役割を果たしている点と、平地伽藍は奈良朝以来の伽藍構成を継承していることを述べている。これについても、現在の研究状況に影響するほどではないと思われる。櫻井敏雄(1986・1987)による山岳宗教の建築研究では、原初的な建築形態として岩窟寺院を想定し、現存遺構を集成している。松崎照明による一連の懸造建築の研究(松崎・荒木1987ab、1989、1990、1991)は、文字通り、現存する山間部の懸造建築を主題とするもので、石山・長谷・清水の観音霊場で礼堂・舞台として9世紀に懸造が成立したことを指摘しているが、山林寺院全般を扱っているわけではない。山林寺院の発掘調査に対して建築史学から発言しているのは、現在のところ、山岸常人ひとりと言って過言ではない(山岸1991、1996、1997、2007、2011)。如意寺伽藍についての研究を足がかりに、大知波峠廃寺(静岡県)、中寺廃寺(香川県)、安祥寺伽藍(京都市)などの発掘遺構を解釈し、頭高山遺跡(神戸市)などの堂塔の復元研究に取り組んでいる。以上の先行研究は、奈良時代の伽藍に後続する密教伽藍に注目した研究、山林寺院の現存建築形態についての研究、山林寺院の発掘堂塔の復元研究が主となっている。これら以外に、山林寺院の立地、堂塔配置、時期、社会的背景などに踏み込んだ総合的な建築史学的研究はほとんどない。「山林寺院の原像を求めて」シンポジウムは、岩窟系山林寺院を本格的に扱う斬新なもので、このような状況にある研究史の空白を埋める意義深い研究会である。

3-2 山林寺院の現存建築遺構

現存する山林寺院建築の代表的遺構を紹介しておく。

室生寺金堂・五重塔(奈良) 奈良県の室生寺(太田編1984)は手前の室生川に面して住房などが建ち、そこ

から石段を上った平場に金堂が建っている(図4)。さらに上がっていくと五重塔があり、それから谷をいったん下りてまた上ると「奥の院」に至る。

金堂は9世紀初期の建立とされ、身舎(入側筋)は桁行3間×梁間1間の四面庇で、側まわりのみ身舎梁間を2間とする(図5・6)。正面のみ孫庇(広庇)をつける。広庇の屋根は^{すがるほふ}縫破風にしており、この床下を懸造にして東柱を立てている。現在の孫庇は江戸時代の再建だが、鎌倉時代には存在していたことが分かっている。室生寺金堂は現存する日本最古の山林寺院金堂であり、また現存する最古の懸造仏堂として注目される。

五重塔(図7・8)は屋外に建てられた木造小塔である。建築年代は金堂に近い平安時代初期(西暦800年前後)とされる。初重平面1辺が8尺(2.4m)で、非常に小さな塔であることが分かる。柱間寸法は中央間2.950尺、両脇間2.565尺を測る。部材の比例が特異で、柱が太く肘木が短い(図9)。室生寺五重塔と次に述べる醍醐寺五重塔を比較すると(図10)、前者の柱が異常に太いことが分かる。逆に、組物から上の部材が小さめになっていて、木割の面では、非常に特殊な遺構になっている。

醍醐寺伽藍(京都) 醍醐寺は山上伽藍と山下伽藍に分かれている(西川・山根・有賀編2002、図11)。五重塔は山下にあるので、実際には「山林寺院」ではなく、平地寺院に建てられた塔である。山上伽藍の「上醍醐」がまず876年に造営され、山下伽藍の「下醍醐」は919年に造営された。下醍醐は金堂と五重塔の建つ平地寺院であり、上醍醐の方が尾根沿いの平場に建物を配する山林寺院である。上醍醐の伽藍(図12)では准胝堂と如意輪堂が最初に建立され、それから伽藍が整備されていった。現存する遺構では、薬師堂が1112年の建立で国宝に指定されているが、それ以外の建物は焼失後の再建である。鎌倉時代に再建された経蔵(図13)は、惜しくも1939年に焼失したが、桁行3間×梁間2間の正面に庇をつけ



図7 室生寺五重塔(箱崎撮影)

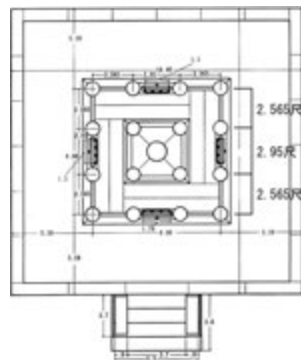


図8 室生寺五重塔初重平面図(太田編1984より転載)

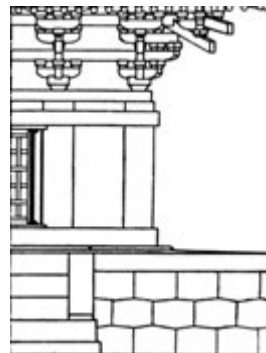


図9 室生寺五重塔初重組物(同左)

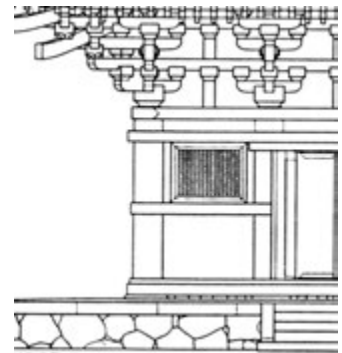


図10 醍醐寺五重塔初重組物(同左)

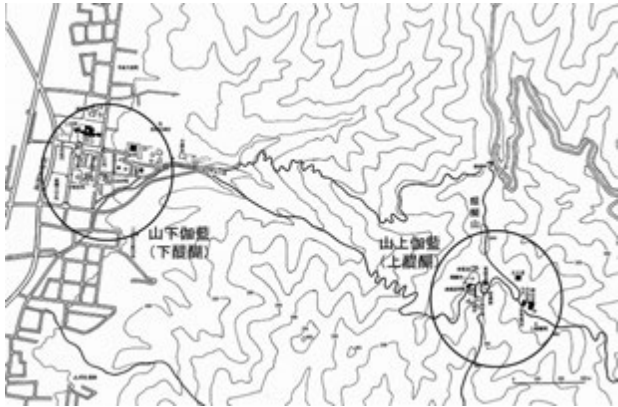


図11 醍醐寺伽藍 (西川・山根・有賀編2002より転載)

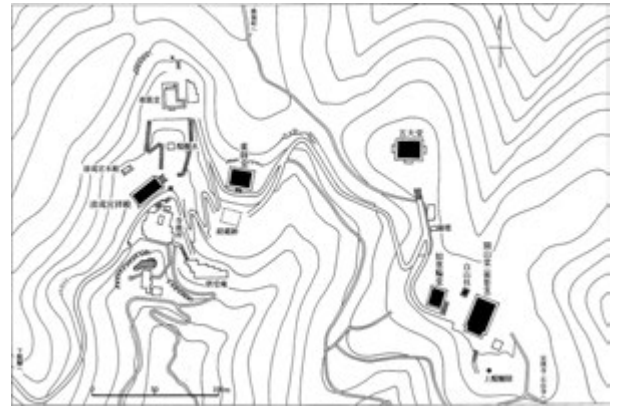


図12 上醍醐伽藍配置図 (同左)

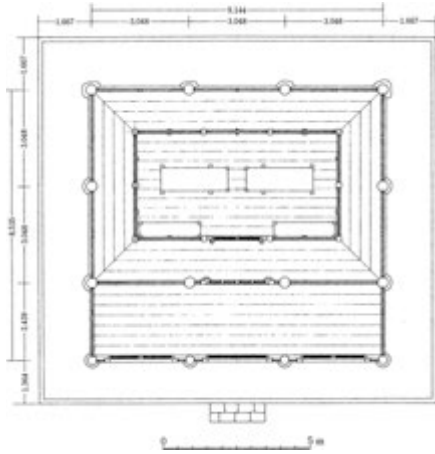


図13 醍醐寺経蔵平面図 (同左)

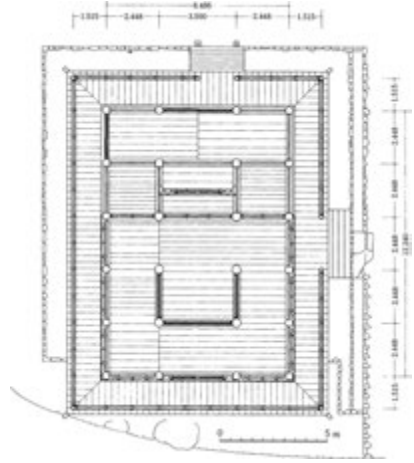


図14 醍醐寺如意輪堂平面図 (同左)

た建物で、文献資料から、古代も同様の形式になることが分かっている。1606年に建立された如意輪堂 (図14) は3間4面で、梁間1間の四面に庇をめぐらした古代の平面をよく保っている。

東大寺二月堂 (奈良) お水取りで有名な東大寺二月堂 (図15、1669年) は、その発展過程が山林寺院を考える上でも一つの有効な視点をもたらしている (山岸1982、藤井1984)。現在、正面部分は懸造になって大きな平面を有するけれども、もとは桁行3間×梁間3間 (3間2面) の内々陣だけの仏堂ではなかったかと考えられている (図16)。内々陣には屋根がかかり、正面には唐破風までついているが、少なくとも平面に関しては奈良時代に遡る可能性がある。内々陣は平場に建ており、懸造になっていない。その後、正面に5間1面の礼堂を付加して ^{ならびどう} 双堂形式とし、さらに内々陣の周囲3方に庇をめぐらせ、背後に後陣を付加したのが鎌倉時代とされる。そこからさらに庇を付加し、「造合の間」の柱を省略して内部空間を確保しつつ大屋根で全体を覆い、

現在の姿になったと推定されている。二月堂の断面図をみても、内々陣は平場にあり、後世に増設された前側が懸造になっていることが分かる (図17)。京都の清水寺、滋賀の石山寺本堂でも、同様な変化を読み取れる。当初の小さな仏堂が発展していった過程を示す事例であり、古代からの信仰が持続されると、こういう変化がおきるということを知っておくべきであろう。

4. 山林寺院遺跡と考古学的研究

4-1 山林寺院の立地

山林寺院は「里山」に立地する例が少ない。山林修行だけではなく、里へ出て在地の有業者層や民衆がかかわる必要があるためで里にも近いが、山に入り込んでいるという地理的利便性から「里山」が選択されるのであろう。また、交通の要衝とか、郡や国の境に建てられる例が多いと言われている。静岡県の大知波峠廃寺はその代表である。一方、山深い「奥の院」的な場所でも寺院遺跡がみついている。たとえば静岡県の大光寺遺跡

は、山林修行の性格が非常に強い場所ではなかったか、
とされている（松井2011）。こうした立地のあり方について、上野川勝（2007）は以下のような分類を試みている。

- 1類：山頂付近に広大な寺域を造営し、山麓にも関連寺社をもつ場合がある
滋賀・延暦寺、和歌山・金剛峯寺、福島・慧日寺
- 2類：広い谷の奥部の山腹や山麓に造営
岩手・国見山廃寺、茨城・東城寺、愛知・普門寺跡
- 3類：細長い谷の奥部の山腹や山麓に造営
愛知・大山廃寺、滋賀・崇福寺、埼玉・馬騎の内廃寺
- 4類：細長い谷の川に面する山腹や山麓に造営
奈良・室生寺、山形・立石寺、岩手・黒石寺

山林寺院の遺跡には平場（加工段）がある。山の斜面に大小の平場があり、平場相互が隣接しながら面的に拡がりをみせる。それはひな壇状に展開する場合もあり、ときに池や湧水などを伴うことも特徴としてあげられる。堂宇の背後、あるいは寺域内や山腹に近接したところに巨岩や岩場があり、むしろそういう土地を選択して寺院を建立したのであろう。平場と岩場の関係は摩尼寺「奥の院」遺跡がまさにその代表例であろう。

このほか瓦、鉄などの生産遺跡が付随する場合もある。群馬県の宇通遺跡は9世紀後半～11世紀の山林寺院で、周囲に製鉄遺跡が分布する。砂鉄や木炭が寺院に必要だったと推測されている。森林開拓の限界標高点に隣接する位置に境内を造営しており、有力な古代氏族の存在を推測させる。また、須恵器の生産遺跡を伴う場合もある。埼玉県馬騎ノ内廃寺では土器の生産終了とともに

寺院が廃絶することが発掘調査から判明している。さらに、蕎麦の栽培が花粉分析で判明する事例もある。

4-2 山林寺院の成立と展開

山林寺院の歴史的展開について、後藤建一（2003）と久保智康（1999）の解釈を引用しておく。後藤は以下の4期に分期している。

- I期（8世紀中期以前＝国分寺造営以前）：中核寺院（氏寺）とそれに関連する山林寺院。
「氏寺ネットワーク」：連帯関係が強い。在地領主の領導が大きい。
- II期（8世紀中期～10世紀前半）：国分寺とそれに関連する山林寺院。
「国分寺ネットワーク」：国策に連なる瓦の供給・享受。
- III期（10世紀前半～11世紀後半）：国衙主導による中核寺院の修復、古代氏寺からの転換。
- IV期（12世紀後半～15世紀後半）：修験の成立、納経や蔵骨器などの死者埋納。

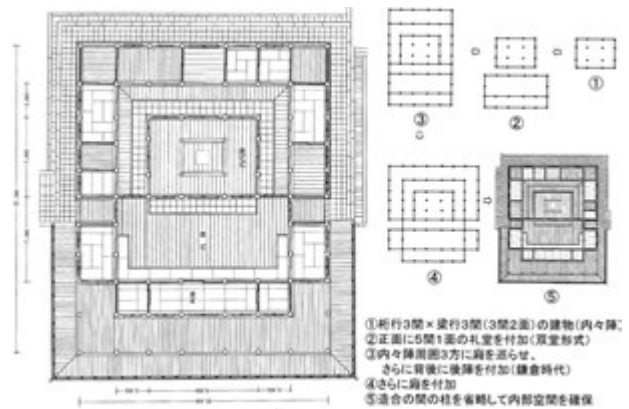


図16 東大寺二月堂の平面とその変遷
（『日本名建築写真選集2巻 東大寺』新潮社1992より転載）



図15 東大寺二月堂（箱崎撮影）



図17 東大寺二月堂断面図
（『奈良県史8 建築』名著出版1998より転載）



図18 里川E遺跡全体図（櫻田1996より転載）

国分寺造営前、造営後、平安時代半ば以降、中世という大きな分期である。一方、久保は加賀・越前の事例から、国府の周辺と郡や国の境の山林寺院が平安後期に栄える原因は、宗教政策の中心として国衙が梶子入れをしたのだらうと述べている。すなわち、中央政府が国分二寺（国分寺と国分尼寺）に諸国の安寧を記して読経悔過を修せしめたのと同様に、国衙のみずから国域内の疫病消除を求めて、山林寺院に薬師悔過や十一面悔過を勤修させたのではないかとする。久保は具体的な山林寺院の機能について触れており、非常に興味深い解釈である。

4-3 山林寺院の建物跡

山林寺院の建物跡について、発掘調査成果から概説してみよう。山林寺院の建物配置については、久保（1999）が整理しているので、これを引用すると、尾根や谷の方向にあまり影響を受けず、南北軸を意識した整然たる配置をとる。標高の高いところに中心の堂宇を建て、やや低い周囲に附属的な建物を配する。主要な堂宇は基本的には南面する。主要な堂宇の前には広い庭を設けることが多い。この庭を使って法要をおこなうのであろう。

一つの平場（加工段）には2～3棟を建てて、これだけで完結する寺院もある。建物は小規模なものも多く、庇のない身舎だけの建物が主流をなす。平地寺院では非常に大きな柱間寸法をとるものもあるが、山林寺院の場合、柱間は6尺から8尺程度にとどまる。身舎の梁間が1間という建物も少なくない。10世紀以降の事例が多いためかもしれないが、礎石建物が比較的多く、前身建物として掘立柱建物を検出する遺跡もある。10世紀以後の遺構では、片庇や孫庇を持つものがあり、11世紀以降で



図19 崇福寺伽藍（滋賀県1941より転載）

は、静岡県の大知波峠廃寺・堂ヶ谷廃寺などで、いわゆる中世仏堂への展開過程を示す遺構が散見される。12世紀以降の建物跡は、現存する建物遺構と共通する、あるいは、それに発展する遺構がみられる。

さらに、多宝塔跡と目される遺構も散見される一方、回廊の遺構はほとんどみつからない。瓦葺きの遺構もあるが、瓦葺きでない樹皮葺き・茅葺き系屋根の例もかなりある。また、群馬県の宇通遺跡では、身舎のみの八角堂、群馬県の黒熊中西遺跡では相輪椽、奈良の馬場南遺跡では方1間の塔、奈良の龍門寺遺跡では四天柱のない塔など、特殊な遺構もみつまっている。続いて、具体的な発掘調査例を示す。

里川E遺跡（石川）山の平場に建つ9世紀末から10世紀前半の遺構群（図18）。背後に崖面があって、中心の仏堂と左右の附属的な仏堂がほぼ対称に配されている（櫻田1996）。中心の仏堂は桁行5間×梁間3間の平面で、①身舎の梁間1間で四面庇（入母屋造）、②身舎の梁間1間で二面庇（切妻造）、さらに③総柱式の楼閣構造が想定可能であろう。

崇福寺（滋賀）7世紀中期に創建された最古の官営山林寺院と呼ばれている遺跡群（図19）。沢に隔てられた3つの尾根筋の平場に遺跡があり、全体で「崇福寺」と通称しているが、文献史料の解釈によると、南半の「梵釈寺」と北半の「崇福寺」に分かれるという（滋賀県保勝会1929・1931、滋賀県1941、近江の古代寺院刊行会1989、梶原2002）。梵釈寺には金堂（3間4面、礎石建物）と講堂（3間4面+正面庇、礎石建物）があり、崇福寺は南側中央に小金堂（3間×3間、総柱礎石建物）と2基の塔（方3間、地下式心礎）があり、その北側に弥勒堂（5間×3間、総柱礎石建物）を配する。建物はほぼ正方位を向いており、瓦積み基壇を伴う。山麓の南

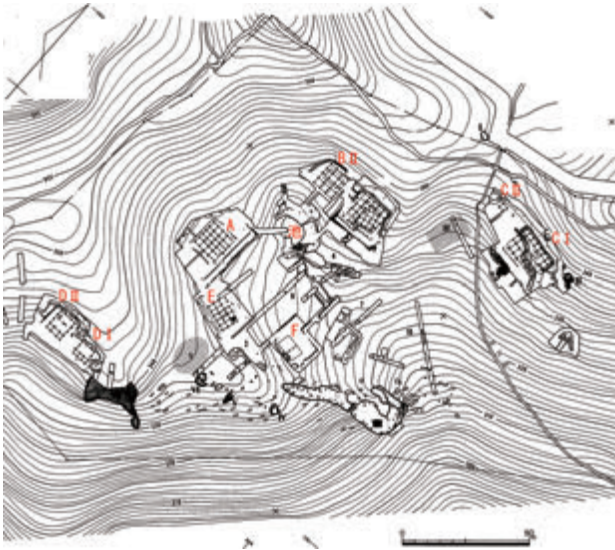


図20 大知波峠廃寺全体図（湖西市教育委員会1996より転載）

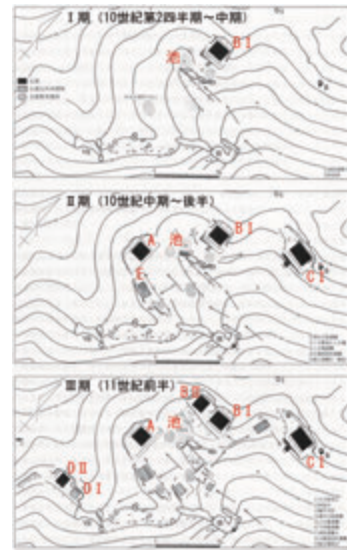


図21 大知波峠廃寺の遺構変遷（同左）

滋賀廃寺と同時期の寺院遺跡であり、「山林寺院」と「平地寺院」のセットと言われている。鉄製品生産に関する遺構はあるが、瓦窯はみつかっておらず、瓦は他所から搬入されたと考えられる。

大知波峠廃寺（静岡）平野部から上がった尾根の平場に池があり、仏堂跡が同心円的に散在する（図20）。創建は8世紀後半まで遡る可能性があるが、検出した遺構は、10世紀前期～11世紀前半のものである（湖西市教育委員会1996）。その変遷は、10世紀第2四半期から中頃にかけて、池に面するB I 建物が建てられたが、次第にたくさんの仏堂が建ち並ぶようになったと推定されている（図21）。礎石建物は以下のような平面をしている（図22）。

- A : 身舎3間×1間+四面庇+正面広庇
（前面には基壇の石積みあり）
- B I : 同上
- B II : 総柱3間×3間+正面広庇
- C I : 身舎5間×2間+四面庇（正面広庇）
- D I : 身舎3間×2間+正面庇
- D II : 身舎3間×3間+正面庇
- E : 身舎5間×2間+正面部分的に庇

A～Eは平安時代における仏堂平面の変化をよく示している（山岸1996・1997、図23）。Aは身舎1間の四面に庇をつけて、その前面に孫庇をつける形式である。B I・B IIもAによく似た形式である。それに対して、C Iは左右と背面の3面に庇をもつが、正面には同じ庇がめぐらず、身舎に広庇を直接つけている。A・B I・B IIと類似する平面をもつ現存建築遺構は室生寺金堂で、

C Iに類似するのは大分県の富貴寺大堂だが、これらの柱配置と完全に一致する現存建築遺構はない。古代的な仏堂が内陣・外陣をもつ中世仏堂へと変化する発展過程を示す重要な遺構である。

国見山廃寺（岩手）10世紀後半～11世紀ごろに造営された東北最大の山林寺院と言われ（北上市教育委員会2003、杉本2011）、山頂部分などに点在して遺構がみつまっている（図24）。国見山廃寺の建物跡を東北地方の仏堂跡と比較すると、国見山廃寺の建物は全体的に規模が小さいことが分かる（図25）。SB001は塔の遺構で、3間×3間の平面の中心に心礎がみられる。SB003も3間×3間の平面だが、中心に心柱を支える心礎がなく、多宝塔跡の可能性が指摘されている。SB011は「中心堂」と称する7間堂で、背後の斜面のところから平場をつくって礎石がずらりと並んでいるが、前面はまた斜面となっており、懸造の可能性もあるだろう（図26）。礎石建物 SB012と掘立柱建物 SB097は重複関係にあり、礎石建物に先行する掘立柱建物があったことも分かる。

中寺廃寺（香川）8世紀の土器がみつかるので、その時期の創建の可能性が指摘されているが、平場の遺構は10～12世紀ごろのものである（まんのう町教育委員会2007）。かなり奥深い山間部に所在するが、山頂ではなく、山頂から少し下った場所に遺跡がある（図27）。「主峰」と呼ばれる信仰上重要な山があるのだが、主峰には至らない中腹部分の山頂付近に営まれている。時期といい、立地といい、摩尼寺「奥の院」遺跡との共通性を強く感じさせる山林寺院跡と言えよう。A地区と呼ばれる場所では、小さな平場に3間×3間の塔の遺構があり、

その背後の小さな平場には3間×1間の仏堂が造られている(図28)。またB地区(図29)では、広場状遺構に東面する5間×3間(5間2面)の仏堂があり、講堂ではないかと考えられている。やや南に下った斜面では3間×2間の掘立柱建物が建て替えられており、これを僧房とみる意見がある。

池辺寺(熊本) 空撮写真をみると(図30)、マス状のブロックが縦・横とも10列、あわせて100個並んでいる(熊本市教育委員会1996、網田2009) その一つひとつが「石組遺構」であり(図31)、いずれも石塔の基礎遺構ではないかと解釈されている。

黒熊中西遺跡(群馬) 先に紹介した相輪様の遺構を残す山林寺院の遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団1992)。塔の相輪を地面に立てて、その外側に支柱が4本、十字形に配する。延暦寺の相輪様(図32)は新しいものだが、天台宗のシンボルでもあり、延暦寺でも古くから相輪様はあったと言われる。黒熊中西遺跡の場合、真ん中に礎石が一つあり、十字形にピットを並べている(図33)。

5. 山林寺院研究の課題

まず発掘調査した遺跡が仏教寺院であるか否かをどのようにして判別するのか、という問題がある。山中で瓦が出土すれば寺院である可能性が高いとされるが、瓦だけで遺跡の機能や性格を特定できるわけでもなく、少なくとも仏教系の遺物が必要であろう。「寺」と記された墨書土器が出土する場合、その遺跡が寺院である蓋然性は一気に高まる。さらに遺構平面などの特徴を分析し、総合的に寺院遺跡か否かを判断すべきと思われる。

さて、その遺跡が「寺院」であるにしても、「山林寺院」と認識できるか否か、という問題が残る。これについては、後藤建一(2003)が以下のように述べている。まず、俗地と隔絶した場所にあること。かりに山間部に立地したとしても、周囲に集落遺跡が近接する場合、「山林寺院」とはみなし難い。集落から離れた山間部に確実に立地することが証明できる場合にのみ「山林寺院」の呼称がふ

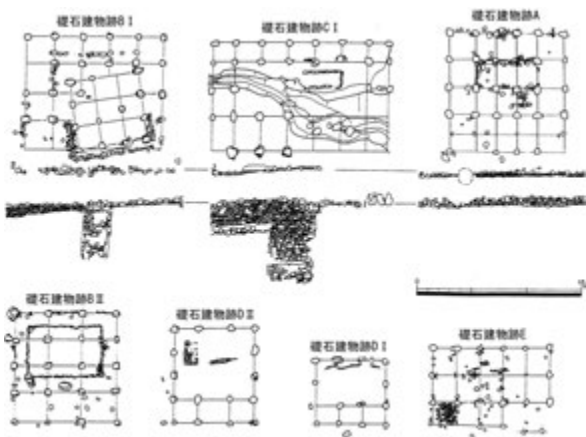


図22 大知波峠廃寺の礎石建物跡(同左)

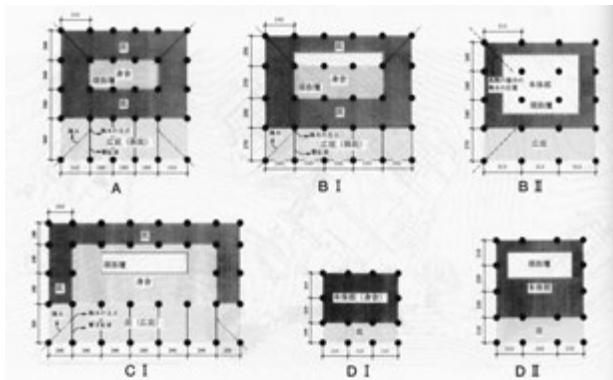


図23 大知波峠廃寺・建物平面模式図(山岸1996・1997より転載)



図24 国見山廃寺全体図(杉本2011より転載)

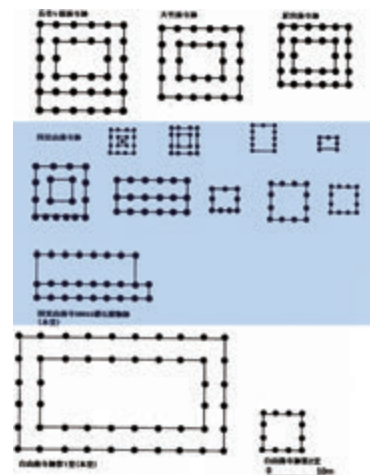


図25 国見山廃寺の建物規模(同左)

さわしい。一方で、滝や湧水や巨岩などの浄処、すなわち清浄性のある場所に近接していることも有力な条件になる。清浄性との関係に興味深いのは、寺院遺跡の近隣に式内社などの古社がしばしば存在することである。神社の境内は神聖な場所として認識されていたから、そういう立地関係が認められるならば「山林寺院」と理解してよいのではないかと、というのである。

次に寺域の把握が問題となる。平地寺院の場合、掘立柱塀・土塁・築地塀などの遮蔽施設の遺構が確認できれば寺域の比定は可能だが、山間部でそれを検証するのは非常に難しい。堂塔を建立しうる平場を徹底的に調査するほかないのかもしれない。

さらに時期の問題がある。時期については、遺構よりも遺物に頼らざるをえないのが実情である。また、古い遺物が出土するけれども、遺構は後世のものばかりで、古い時代に遡らない例も少なくない。こういう場合、当初から礎石建物であったものが後世に破壊されている可

能性も考慮する必要がある。「掘立柱建物から礎石建物へ」という常識的な変化が山林寺院に通じるのかどうかについても、まだよくわかっていない。その一方で、基壇建物の下層に前身の掘立柱建物が建っていた可能性がある。たとえば、大知波峠廃寺では基壇建物跡がみつまっているが、保全状態の遺構を破壊できないので下層遺構を調査していない。下層に創建期の掘立柱建物が眠っている可能性を想定すべきだろう。

以上、山林寺院に係わる研究史、現存建築遺構と発掘調査事例を、わずかではあるが取り上げ、課題を整理した。すでに述べたように、現状の研究、とりわけ建築史学的研究はそれほど深まっていない。今後発掘調査を含めて、研究の幅をひろげ、内容を深めていく必要があり、非常に将来性が見込める研究分野と思われる。



図26 東からみた国見山廃寺 SB011 (北上市教育委員会2003より転載)



図28 中寺廃寺A地区第2・3テラス遺構図(同左)



図27 南東よりみた中寺廃寺跡遠景 (まんのう町教育委員会2007を一部改変)

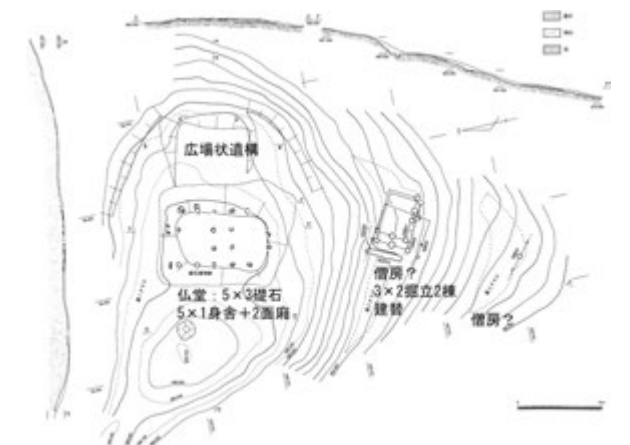


図29 中寺廃寺B地区第1～3テラス遺構平面・断面図(同左)

6. 余論 - 摩尼寺「奥の院」遺跡の調査から

2010年におこなった摩尼寺「奥の院」遺跡の発掘調査では、後藤（2003）が整理した山林寺院研究の課題を一定程度クリアできていると自負しており、ここに成果の一部を披露しておきたい（浅川編2012）。その前提となるのは、日本における山の信仰の変容についての認識である。

古来、日本人は「特殊な自然物」に聖性を感じ取っており、そのような自然崇拝が仏教や神道に先行して存在した。6世紀に仏教が伝来し、7世紀後半に外来宗教としての仏教に反発する形で神道が成立するという初期宗教の展開がある。まず仏教が山林の自然崇拝と接触し、その結果生まれたのが一般に「雑密」と呼ばれる8世紀以前の山岳仏教であり、これを浅川は「初期修験道」としばしば表現してきた（浅川編2011）。山陰地方の著名な山林寺院では、8世紀以前の雑密の時代に開山し、9

世紀の円仁の時代に再興したとする二重構造の縁起をもつものが少なくない。三徳山三仏寺、浮浪山鰐淵寺がその代表格であるけれども、縁起の示す開山・中興伝承は信頼性に乏しいという評価に甘んじている。しかしながら、岩窟・岩陰と複合する懸造仏堂を有する「奥の院」は8世紀以前の縁起、本堂（根本堂）を中核とする山麓の境内は天台宗による再興伝承と相関している。二重構造の縁起を反映するこうしたゾーニングには注目すべきであり、とりわけ「奥の院」が8世紀以前に遡る雑密の行場であるとの見方が可能なわけだが、それを裏付ける証拠がないのもまた事実である。この課題を克服するには、「奥の院」に係わる考古学的な研究が必要であり、円仁伝承を有する喜見山（摩尼山）の摩尼寺「奥の院」遺跡を発掘調査することになった。

摩尼寺「奥の院」遺跡は巨巖の下段が大きく抉られた岩陰に石仏・木彫仏を祀り、上段には小振りの岩窟仏堂



図30 池辺寺遺構百塚地区C地点空撮写真
（『史跡 池辺寺跡 保存整備基本構想書』
熊本市教育委員会2008より転載）



図32 延暦寺相輪様（箱崎撮影）



図31 池辺寺石組遺構（同左）

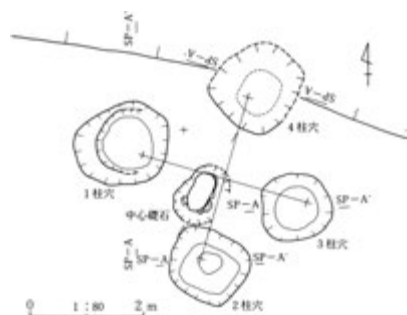


図33 黒熊中西遺跡・不明遺構・遺構図
（群馬県埋蔵文化財調査事業団1992より転載）



図34 摩尼寺「奥の院」遺跡Ⅱ区平場 (2010)



図35 摩尼寺「奥の院」遺跡の巨巖 (2012)

を掘削して奥の仏龕に小塔を安置する (図34・35)。巨巖の正面には2段の平場 (加工段) が造成されており、礎石と推定される平らな石が多数地表に露出している。発掘調査の結果、上層では8間×8間以上の礎石建物SB01が検出された (図36)。上層整地土の最下層からは15~16世紀の備前焼の破片や宋の白磁片が出土しており、上層平場の造成年代は16世紀以降と判定される。SB01は『因幡民談記』(1688)に描かれた摩尼山頂近くの楼閣式仏堂にあたり、18世紀前期まで存続したであろう (図37・38)。摩尼寺が境内を「奥の院」から山麓に移すのは、比叡山安楽院末寺となった享保3年 (1718)以降と思われる。

大知波峠廃寺と同様、上層の保全状態がよいため、下層の調査はトレンチの壁と畦 (バルト) 周辺に限られた。下層では、巨巖側ではほぼ水平に削堀された凝灰岩盤を検出し、その岩盤に掘り込まれたピットが10ヶ所みつまっている。そのうち3つのピット (p 201-p 202-p 203) は7尺等間で直線をなし (図39)、また、それとほぼ直交する位置で小さな掘立柱穴を検出している (柱間10尺)。下層の発掘面積が小さいので復元は容易でないが、巨巖に掘り込んだ岩窟 (仏像を安置する岩屋) を掘り、窟を覆う掛屋 (片流れの庇) を支える柱が岩盤ピットに納まり、その前に土庇を設けて小さな礼拝空間としていた可能性を想定している (図40)。

ここでまず年代の問題をとりあげておきたい。下層は発掘面積が狭小であったことも影響して、土器片は7点

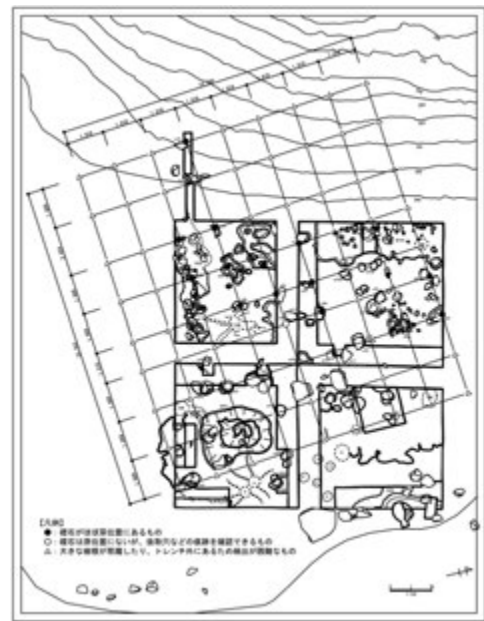


図36 摩尼寺「奥の院」遺跡上層遺構図

しか出土していない。うち4点のみ年代の判定が可能で、平安時代10世紀以降とみなされる。これだけでは年代の確実性に欠けるので、下層整地土から出土した炭化材をAMS法放射性炭素年代測定にかけた結果、989AD~1030AD (信頼性95.4%) という暦年代が得られた。土器の編年とはほぼ一致しており、下層整地の年代は10世紀後半以降と考えてよかろう。円仁が「奥の院」を開いたという伝承の信頼性はさらに薄らいだと言える。

問題は上層出土土器に含まれる下層相当年代の土器の



図37 『因幡民談記』にみえる2棟の重層建物

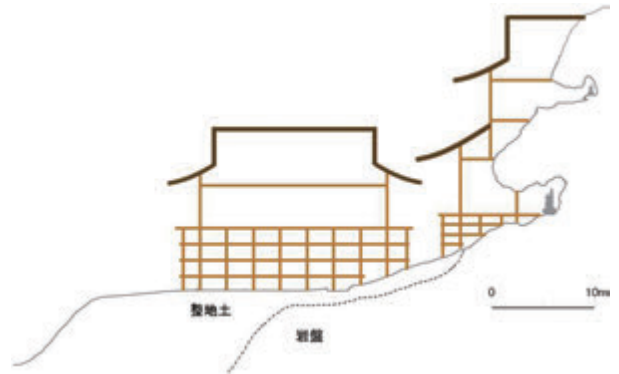


図38 上層復元イメージ図



図39 摩尼寺「奥の院」遺跡下層遺構図

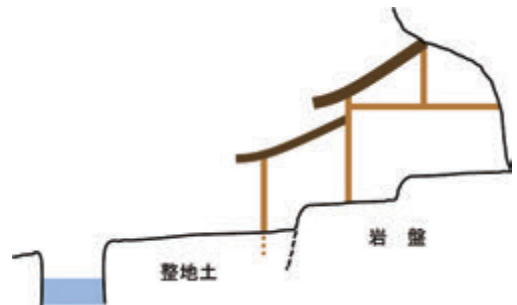


図40 下層の岩屋・掛屋・土底の復元イメージ

多さである。Ⅱ区（巨巖正面の平地）上層出土土器の総数は125点を数え、平安時代以前の土器45点を含む。常識的には下層遺構と係わる遺物が上層に混入したと理解できるが、そのなかで平安時代初期から奈良時代（あるいはそれ以前）に遡りうる土器が12点も含まれている。前章で指摘された「古い遺物が出土するけれども、遺構は後世のものばかりで、古い時代に遡らない例も少なくない」という問題が摩尼寺「奥の院」遺跡でも露呈している。私見ながら、古い時代の遺物は必ずしも遺構を伴う必要はない。摩尼山の場合、山頂に屹立する^{たていわ}立岩は帝釈天降臨の依代として知られるが、古くは磐座であったと推定され、「奥の院」の巨巖も同類の神聖な岩であった可能性は十分ある。すなわち「奥の院」から山頂にかけての巨巖露出エリアは、古くから巨巖を崇拜する信仰の場であり、8～9世紀に遡りうる土器片は神聖な巨巖

に係わる活動の痕跡とみることもできよう。すなわち、「仏堂」などの大袈裟な施設が巨巖周辺に存在する必要はなく、そこは野辺の祭場であった可能性がある。かりに建築的施設が存在したとしても、それは行者の住まいを兼ねた「草庵」もしくは「草堂」であったはずで、規模の小さい掘立柱建物の可能性が高いと思われる。こうした山の斜面に平地を造成する場合、整地土の深さは地表面下2～3mに及ぶので、地山面に掘り込まれた掘立柱建物の柱穴を検出するのはきわめて困難な作業である。

これと関連して、後藤（2003）が指摘する清浄な場所、および神社との近接関係についても触れておきたい。山林の「特殊な自然物」と寺院・神社の係わりは混交している。まず室生寺と室生龍穴神社の関係を例として取り上げてみよう。両者は非常に近接した位置関係にあるが、室生龍穴神社から800mばかり林道を上がった山の谷筋に滝が落ちており、滝壺を囲む岩壁の窪みに「龍穴」がある（図41）。古来、龍の潜む窟^{いわや}として信仰の対象になっていた。ここは龍穴神社の「奥宮」と呼ばれているが、本殿や拝殿などの建築的施設は一切ない。「龍穴」こそが御神体であり、今も対岸から遙拜している。『続日本紀』によると、宝亀年間（770-781）に山部親王（後の桓武天皇）の病氣平癒のため、室生の地において延寿の法を修したところ、龍穴に棲む龍神の力で見事に回復したの

で、興福寺の僧賢璟^{けんきやう}が朝廷の命によりここに寺院を造ることになったという。これが室生寺創建の背景である。一方、山麓の龍穴神社は室生寺創建後に室生寺に近接する位置に新造されたものである。これを時系列的に整理すると、以下ようになる。

- ①山上の龍穴を御神体として崇拝する時代が古くからあった
- ②龍穴に近い位置に室生寺を造営。
- ③山麓に龍穴神社を構え本殿を建てる。龍穴は「奥宮」となる。

鳥取県内でも類似する神仏の融合プロセスを暗示する例がある。八頭郡若桜町の不動院岩屋堂は岩窟に懸造の仏堂を設ける代表的な遺構である。開山は奈良時代と伝承され、仏堂は南北朝期に再建された楼阁式で、重要文化財に指定されている。岩屋堂の正面には吉井川に面する位置に鳥居が立っている(図42)。岩屋堂の周辺は崖のような岩山で、その岩陰に岩屋神社の本殿を構える(図43)。中世的修験道の行場にふさわしい神仏習合の姿をみてとれるわけだが、本殿は江戸時代後期の建築であり、それが造替であるにせよ、寺院の創建よりも遅れて神社が成立した可能性が高いであろう。とすれば、室生寺と似た変遷が想定される。

- ①巨巖を磐座とし岩陰を祭場としていた時代が古くからあった。
- ②仏教との接触により岩窟を掘って岩屋堂を建立。
- ③岩陰に神社本殿を建立。



図41 室生龍穴神社「奥宮」の龍穴

たしかに「特殊な自然物」を崇拝し、その近隣に寺院や神社を営むことはあっただろう。ただ、神社の近くに寺院を造営したとは限らず、寺院の近くに神社を新設した場合も少なからずあったことを見落としてはならない。その流れは自然崇拝→仏教→神道という山の信仰の受容プロセスによく合致している。

最後に寺域の問題についてもコメントしておく。摩尼寺「奥の院」遺跡で花粉分析をおこなったところ、上層でのマツ属の多さが目についた。現在の「奥の院」周辺は照葉樹と落葉広葉樹の混交した原生林に近い植生を示し、2次林であるマツはほとんどみられない。しかし、『因幡民談記』(1688) 所載の喜見山摩尼寺図にはマツと思われる樹木が多数描かれており、それは「奥の院」をはじめ建物の周辺に集中している。マツなどの針葉樹は境内と山の原生林を分ける重要な指標であり、両者の境界に植えられていた可能性は十分あるだろう。そういった植生の痕跡が平場との関係で読み取れるならば、曖昧ながらも山林寺院の「寺域」の解明に貢献できるかもしれない。

山林寺院の研究動向を概観した結果、岩窟・岩陰仏堂と係わる調査研究は盲点中の盲点であることを改めて理



図42 不動院岩屋堂



図43 巨巖の岩陰に建つ岩屋神社本殿

解できた。岩窟・岩陰仏堂の研究は石窟寺院との係わりなどアジア的視点が必要であり(岡垣・浅川2012、眞田・清水・檜尾・浅川2013)、国内外両面からのアプローチを待っている。

【附記】 本稿は平成23年度鳥取県環境学術研究費助成研究「摩尼寺奥の院遺跡の環境考古学的研究」(研究代表者・浅川)による鳥取環境大学主催のシンポジウム「山林寺院の原像を求めて－栃本廃寺と摩尼寺奥の院遺跡」(2011年12月17日、於仁風閣)で箱崎が報告した内容を基にしている。箱崎の講演録音データをシンポ事務局の中島が文字データ化し、浅川がそれを校閲して成稿した後、箱崎が全文を校正してテキストを完成させた。箱崎の講演内容は「2 山林寺院とは何か」から「5 山林寺院研究の課題」までであり、最後の「6 余論」は、2012年度鳥取環境大学公開講座における浅川の講演「聖なる巖(いわお)－霊山の奥宮・奥ノ院と巨岩信仰－」の内容の一部に加筆修正を施したものである。なお、本稿校正中に『季刊考古学』第121号で「山寺の考古学」と題する特集が組まれた。本稿の内容と重複するところが少なくなく、ご参照いただければ幸いである。

参考文献

- 浅川滋男編(2012)『摩尼寺「奥の院」遺跡－発掘調査と復元研究－』2010～12年度科学研究費補助金基盤研究(C)・2011年度鳥取県環境学術研究費助成研究成果報告書
- 浅川滋男編(2011)『大山・隠岐・三徳山－山岳信仰と文化的景観－』鳥取環境大学建築・環境デザイン学科&鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室
- 岡垣頼和・浅川滋男(2012)「岩窟・岩陰型仏堂と木造建築の関係についての調査ノート」『鳥取環境大学紀要』第9号・第10号合併号：p. 135-158
- 網田龍生(2009)『池辺寺跡』日本の遺跡38、同成社
- 上野川勝(2007)「古代・中世の山林寺院について」『唐沢考古』26号：p. 1-15
- 上原真人(1986)「仏教」『集落と祭祀』岩波講座日本考古学4、岩波書店：p. 307-366
- 上原真人(2002)「古代の平地寺院と山林寺院」『仏教芸術』265号：p. 13-25
- 近江昌司(1998)「古代山岳寺院小考」『考古学ジャーナル』426号：p. 5-8
- 近江の古代寺院刊行会(1989)『近江の古代寺院』
- 太田博太郎(初版1947)『日本建築史序説』彰国社
- 太田博太郎編(1984)『日本建築史基礎資料集成11 塔婆I』中央公論美術出版
- 檜田 誠(1996)「里川E遺跡」『大知波峠廃寺跡シンポジウム事業報告書』大知波峠廃寺シンポジウム実行委員会、湖西市教育委員会：p. 112-115
- 梶原義実(2002)「最古の官営山寺・崇福寺(滋賀県)－その造営と維持－」『仏教芸術』265号：p. 96-113
- 北上市教育委員会(2003)『国見山廃寺跡』
- 久保智康(1999)「国府をめぐる山林寺院の展開」『国宝と歴史の旅』3、朝日百科
- 日本の国宝・別冊：p. 25-31
- 熊本市教育委員会(1996)『池辺寺跡I－百塚遺跡C地点・堂床遺跡発掘調査報告書－』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団(1992)『黒熊中西遺跡』
- 湖西市教育委員会(1996)『大知波峠廃寺跡確認調査報告書』
- 後藤建一(2003)「山林寺院」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会：p. 264-313
- 斎藤 忠(1997)「山林寺院の研究」『仏教考古学と文字資料』斎藤忠著作選集5：p. 67-104
- 櫻井敏雄(1986)「山岳宗教建築の礼拝空間－その成立と展開－山岳宗教の建築－(上)」『仏教芸術』168号：p. 49-79
- 櫻井敏雄(1987)「山岳寺院の主要堂宇としての講堂－山岳宗教の建築(下)－」『仏教芸術』173号：p. 29-63
- 眞田廣幸・清水拓生・檜尾恵・浅川滋男(2013)「クチャの千仏洞を訪ねて－中国最古の石窟寺院－」『鳥取環境大学紀要』第11号：p. 85-98
- 滋賀県保勝会(1929)『滋賀県史蹟調査報告 第2冊 大津京址の研究』
- 滋賀県保勝会(1931)『滋賀県史蹟調査報告 第3冊 大津京址の研究 補遺』
- 滋賀県(1941)『滋賀県史蹟調査報告 第10冊 大津京址(下)』
- 杉本 良(2011)「北上市国見山廃寺跡(岩手県)」『仏教芸術』315号：p. 9-22
- 藪田香融(1957)「古代仏教における山林修行とその意義－特に自然智宗をめぐる－」『南都仏教』4号：p. 45-60
- 高島成侑(1974a)「国東山岳寺院の研究－その立地と現状－」『日本建築学会九州支部研究報告』：p. 233-236
- 高島成侑(1974b)「国東山岳寺院の研究 その2－

- 清浄光寺 - 』『日本建築学会学術講演梗概集』：p. 1503-1504
32. 高島成侑 (1976) 「国東の山岳寺院 その3 - 本山の寺院 - 』『日本建築学会九州支部研究報告』：p. 337-340
33. 西川新次・山根有三・有賀祥隆編 (2002) 『醍醐寺大観』第1巻、岩波書店
34. 箱崎和久 (2011) 「学界展望 発掘 - 寺院建築関係 - 』『建築史学』57号：p. 118-146
35. 福山敏男 (1983) 「初期天台真言寺院の建築」『寺院建築の研究』下 (初出1936)：p. 3-50
36. 藤井恵介 (1984) 「東大寺二月堂建築の中世的展開」『南都仏教』52号 (『密教空間建築論』中央公論美術出版、1998に再録)：p. 127-153
37. 藤井恵介 (1998) 「初期真言密教の伽藍」『密教建築空間論』(初出1986年)：p. 37-61
38. 松井一明 (2011) 「遠江・駿河の山林寺院 (静岡県)」『仏教芸術』315号：p. 107-120
39. 松崎照明・荒木正也 (1987a) 「鰐淵寺蔵王堂、円蔵寺虚空蔵堂 (菊光堂)、鷹価観音堂について I - 懸造の研究 別1 - 』『日本建築学会学術講演梗概集』：p. 923-924
40. 松崎照明・荒木正也 (1987b) 「鰐淵寺蔵王堂、円蔵寺虚空蔵堂 (菊光堂)、鷹価観音堂について II - 懸造の研究 別1 - 』『日本建築学会学術講演梗概集』：p. 925-926
41. 松崎照明 (1989) 「『懸造』という名称について - 懸造建築の研究 その1 - 』『日本建築学会計画系論文報告集』406号：p. 141-151
42. 松崎照明 (1990) 「天川弁財天社拝殿・神倉権現社拝殿について - 懸造建築の研究 別2 - 』『日本建築学会学術講演梗概集』：p. 853-854
43. 松崎照明 (1991) 「古代・中世の懸造について - 懸造建築の研究 その2 - 』『日本建築学会計画系論文報告集』419号：p. 89-98
44. まんのう町教育委員会 (2007) 『中寺廃寺跡』
45. 山岸常人 (1982) 「二月堂建築空間の変遷とその意義」『南都仏教』48号 (『中世寺院社会と仏堂』塙書房、1991に再録)：p. 66-97
46. 山岸常人 (1991) 「如意寺伽藍の形成とその性格」『古代文化』43号：p. 5-12
47. 山岸常人 (1996) 「大知波峠廃寺跡の礎石建物の構造と性格」『大知波峠廃寺跡確認調査報告書』湖西市教育委員会：p. 201-213
48. 山岸常人 (1997) 「大知波峠廃寺の仏堂遺構の特質」『日本建築学会大会学術講演梗概集』：p. 115-116
49. 山岸常人 (2007) 「安祥寺伽藍の復原」『皇太后の山寺 - 山科安祥寺の創建と古代山林寺院 - 』柳原出版：p. 199-212
50. 山岸常人 (2011) 「頭高山遺跡の建物遺構の解釈」『頭高山遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会：p. 79-92
- (受付日2012年8月27日 受理日2012年11月2日)